

平成29年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- | | |
|-----|------------------------------------|
| I | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び |
| II | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成 |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築 |
| IV | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成 |

【 北九州市 】

1 実践テーマ	I、III、V
2 実施対象者	木屋瀬小学校3学年～6学年（合計 210名）
3 展開の形式	(1) 学校における活動 行事名（ 車いすテニス選手との交流を通して ）
4 目標 (ねらい)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 車椅子を使って生活する苦労や工夫を知り、体験を通して考え、障害をもった方たちと共生する社会について考える。 ○ 車椅子テニスの選手の方の話を聞いたり、車椅子に乗ってのテニスを体験したりして、誰もが気持ちよく生きるために必要なことについて自分の考えをもち、実践していこうとする心情を養う。
5 取組内容	<p>1, 事前学習</p> <p>各クラスにおいて、車椅子や競技用の車いすの使用体験を行い、車椅子の乗り方・介助の方法について学習した。その体験を通して、自分の疑問を明らかにし、解決の手立てを考える。（質問内容を考える）</p> <p><u>生活・支えになった人はいますか？</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・忘れられない言葉や大切な言葉はありますか？ ・車いすの生活で一番大変だったことは何ですか？等 <p><u>選手になるまで</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どものころの夢はどんなことでしたか？ ・車椅子で生活をしなければいけないと分かったとき、どんな気持ちでしたか？ ・前向きになれたきっかけはどんなことですか？ ・車椅子テニスをするきっかけは、何ですか？ ・テニスをしていて辛かったことややめたいと思った時はありますか？ あるならなぜ続けることができたのですか？ ・なぜ、パラリンピックを目指そうと思ったのですか？等 <p><u>車椅子テニスについて</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・車椅子テニスの魅力は何ですか？ テニスをして一番楽しかったことは何ですか？ ・車いすテニスで一番の思い出は？ ・毎日どんな練習やトレーニングをどれくらいしているのですか？（筋力づくりも含めて） ・自分を支えているものは何ですか？ 等

2, 講演

- (1) 子ども時代など健常だった頃
- (2) ケガをしてから車いすを始める
- (3) パラリンピックを目指す努力
- (4) リオパラリンピックの経験
- (5) 東京パラリンピックを目指して



3, 車いすテニス実演 (車いすテニス、車いすリレー)

- ・二條選手はテニス経験者の職員を相手にして軽く乱打した。



- ・教職員が車いすに乗って乱打をした。



- ・児童代表 (各学年数名) が車いすテニスを体験した。



6 主な成果

- ・車椅子テニスの二條選手から、実際の車いすを利用しての生活を知ること
で自分の疑問や課題について解決できたようである。
- ・二條選手の講話や体験を通して、人間の強さ・生きがいを聞くことが
できた。「心の中の好きを大切に」「私には絶対無理と言わない」「自分の夢
を宣言する」
の言葉が子ども達の心に残ったようである。
- ・障害者は体が不自由な人だと偏見をもっていたけれども、「足が動かさな

	<p>いなら、手を動かせば良い」というような考えに心を動かされていた。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 人権学習において、「人やこと・もの」に出会わせることの意義を再確認した「講演と実演」であった。
7実践において工夫した点 (事業の特色)	<ul style="list-style-type: none"> • 事前に二條選手と念入りな打ち合わせを行い、子どもの興味のある講演内容、実演内容を考えて計画実施した。
8主な課題等	<p>3～6学年の児童を対象に実施したが、高学年に限定して、車いすテニスの体験を多くしたり、事前に考えていた質問内容等をじっくり二條選手に質問したりする時間的余裕をもたせるべきであった。</p>
9来年度以降 の実施予定	<p>「車いすバスケット」「車いすマラソン」といった地域の人材を生かしたパラリンピック教育、障害者教育に取り組んでいく予定である。</p>